



## 北海道ブロック

併設する小多機で

臨床美術をスタート

●医療法人社団棕櫚の会

(札幌市西区)

# 医

療法人社団棕櫚の会(一木 崇宏理事長)は4月から、

診療所に併設する小規模多機能型 居宅介護「まるごとケアの家ホサナ ホーム」で、臨床美術を導入した。

臨床美術とは、絵やオブジェなどの作品づくりを通して脳を活性化させ、高齢者の認知症予防や改善、ストレスの緩和などの効果を 目指すセラピーの一つである。同 院と交流の深い「ものがたり診療 所」で導入していることを知った

一木理事長がデモンストレーションに参加したが、導入のきっかけだという。

「私自身、絵を描くことには苦手意識がありました。臨床美術士さんのアドバイスに沿って描いてみたら思いのほかうまくできて満足感がありました。認知症予防学会でBPSD改善のエビデンス認定もされており、通所介護のメニューとして効果的であると感じ、取り入れることにしました」

第一歩として札幌に発足したNPO法人アート・ウイズ・ライト臨床美術から講師を招き、2022年8月に、デモンストレーションを開催。参加した利用者らは臨床美術士の声かけに沿って、題材



左から軍司望さん、一木崇宏理事長

のキュウリを選ぶことからはじめ、匂いを嗅いだり割ってみたり、視覚だけでなく五感をフル稼働する「量感画」と呼ばれる方法で思い通りに描き、楽しそうな様子だったという。

介護職員の軍司望さんは、「意外と大胆な描き方だったり、逆に繊細なタッチだったり、普段の利用者さんとは違う面を垣間見れたのは発見でした。一人ひとりの作品に臨床美術士さんから講評も寄せられ、皆さん満足そうな表情を見せていました」と話す。

臨床美術を実施する側の心得としては、①ちがうと言わない、②うまいと言わない、③手伝わない、④急がせない、⑤止めない——と

いったら5つが主なルールだという。本格稼働に際し、同施設のスタッフも臨床美術士から進め方について講義を受け、サポート体制を整えている。

すでに来年3月までの題材も決定し、まずは1年間継続開催する計画だ。一木理事長は、「認知症になると、「何もできなくなった」と自信を喪失してしまう人が多い。満足いく絵が描けたり、人からほめられたりすることで、自己効力感を持つきっかけになれば」と期待を寄せる。

今後は、利用者家族や近隣の子どもたちなど同法人にかかわる、さまざまな地域住民を交えた展開も視野に入れている。



デモンストレーションでキュウリを描く利用者